

○ファミレス

テーブル席に香田リン（24）と香田ハルカ（17）の姉妹がいる。

メニユーを眺めてうーんうーんと熟考するハルカ。

ハルカ「季節の白玉ぜんざいか……それとも  
プレミアムビッグバナナパフェか……和風  
か……洋風か……平面……立体……」

見かねたリンが苛立たしげに、

リン「どっちだっていいでしょうが最後の  
晚餐じゃないんだから！ いいからさっさと  
決めちゃいなさいよ！ 本当トロくさい  
なー」

ハルカ「あーと、えーと、うーん……」

リン「はい十秒前。じゅーう。きゅーう」

ハルカ「あー、えー、ちょ、ちよつと……」

注文を待っているフロア店員が二人を  
呆れたように眺めている。

リン「はい飛ばして三」

ハルカ「ええ！ 飛ぶの！？」

リン「はいー！」

慌ててメニューに視線を走らせ、

咄嗟に指さすハルカ。

ハルカ「じゃ、じゃあこれ下さい！」

店員「チーズハンバーグプレートですねー。

ソースはデミグラスとガーリックと和風  
おろしからお選びいただけますがいかが  
なさいますかー」

ハルカ「ソース！？」

リン、テーブルをドンと叩きつける。

リン「どっちでもえええ！」

### ○墓地（夕）

二人の母親・千影（47）の墓石を  
洗っているリン。その背後で遠くを  
飛ぶ鳥を眺めているハルカ。

リン「あんたさあ、そんなんでやっていける  
と思ってるの？」

ハルカ「うーん？」

リン「その優柔不断とぼんやり癖、なんとか

ならないかって言ってるの。来年から大学  
生なんだよ。進学、するんでしょ？」

ハルカ「ふーん」

リン「ハルカ。聞いているの？」

ハルカ「うーん」

リンが墓前に花を供えると、ハルカは  
手にしたレジ袋から一冊のコンビニ  
コミックを出してその横に置く。

リン「なにそれ？」

ハルカ「お母さんの好きそうなやつ」

リン「石ノ森初期作品集？ 読んでるでしょ。

トキワ荘系はコンプしてるよ」

ハルカ「そうだったか」

○墓地の前（夕）

路上駐車していた車に乗り込むリン。

外に立っているハルカに、

リン「いいの？ 送っていくけど」

ハルカ「いい。ちよつと歩いてから帰る。

このへん久しぶりだから」

リン「ふーん。ま、好きにしな。あそうだ」

リン、リュックから招待状を取り出す。

リン「今週末お姉ちゃんの会社の製品発表会があるから。絵、沢山見れるよ。あんた絵とか好きでしょ？」

招待状を受け取って眺めるハルカ。

ハルカ「絵？」

リン「それ見せれば入れるから。じゃね。あ、それまでに進路のこと、ちゃんと考えておくように」

車を走らせて去って行くリン。

ハルカ、首をかしげて見送る。

### ○商店街（夜）

商店街に光はまばら。ほとんどの店はシャッターが降りて、看板もない。

売地の立て札のある空き地も点在。

やたらと小さな駐車場はあるが、停まっている車は少ない。

開いている店といえばコンビニや牛丼

チェーンぐらいで、ひどく廃れている。  
ハルカはそんな商店街を歩きながら、  
ふと一軒の廃店舗の前で足を止め、  
錆びた看板を眺める。  
その看板は「エチゴヤ」と読める。

○同（夕・回想）

幼少期のハルカとリンが駄菓子屋  
「エチゴヤ」の十円ゲームでケンカ  
しながら遊んでいる。  
それを微笑んで見守る母親の千影。

○同（夜・現在）

切なげに看板を眺めるハルカ。

○祖母の家・居間と和室（夜）

スマホでツイッターを見ながら飼い猫  
の黒猫・クロと戯れているハルカ。  
ハルカの祖母・昌子（70）が台所で  
大福をタップに分けている。

昌子「リンちゃんも悪気があって言ってるんじゃないからねー」

ハルカの生返事。

ハルカ「うーん」

昌子「ハルカちゃんには好きな道に進んで

欲しいんじゃないかねー」

ハルカ「うーん」

クロがハルカの足をかじる。

ハルカ「食べられない」

かじるのをやめないクロ。

ハルカ「それは食べ物じゃない」

大福を仏壇のある和室に持っていく

昌子。千影の遺影に大福を供える。

昌子「はい、大福さん」

遺影の千影は仏頂面を浮かべている。

退屈そうにスマホ画面をスワイプして

タイムラインを見ていたハルカ、そこ

に「香田千影慰霊祭」というハッシュ

タグの付いたイラスト付きのツイート

を見つける。投稿者のアカウント名は

〈ふわふわにゃんこ〉。

ハルカはしばらくそれを眺める。

### ○美術館・外観

### ○美術館・イベントスペース

リンの勤めるアプリ開発会社の代表取締役がスクリーンに投影された派手な製品PR動画を背に、大げさな身振り手振りで新作アプリ〈StandAR〉を紹介している。

### 代表取締役「『赤と黒』で知られる作家の

スタンダードはこのような神秘的な体験を記しています。場所はサンタ・クロッチェ聖堂。スタンダードはその壮麗なフレスコ画を眺めている…そのとき、彼は得も言われぬ陶酔を感じると同時に激しい眩暈に襲われました。圧倒的な芸術作品に触れた際の言葉では汲み尽くせぬ身体の反応、感情の動揺…こうした体験は今日ではスタン

ダール症候群として知られています。

私たちはこの体験をみなさまに提供したい。  
スタンツ、エンド、AR。スタンダールは  
みなさまと共に立つアプリでございます」

リンと上司・村田が少し離れた所で

ボソボソと口論。

リン「技術説明しかできませんし、そのため  
の資料しか用意してませんよ」

村田「でも社長が思いついちゃったんだから。  
思いついちゃったんならしょうがないじゃ  
ない。ウチは技術者が主役ですよって」

リン「主役って偉い人の思いつきでなるもの  
なんですか」

村田「お願いしますよ、ハカセ」

リン「その呼び方やめてくれないですかね」  
代表取締役「老兵は死なずただ消えゆくのみ  
ということ……チーフプログラマーの

香田から説明させて頂きたいと思います」

うんざりした表情で村田を睨むリン。

ヘラヘラした笑顔を浮かべる村田。



リン「何が面白いんじゃない」

演壇に向かうリン。

バタ臭い笑顔で「頼んだよ」という風にリンを見る代表取締役。

### ○同・展示室

様々な絵が展示されている。参加者たちはタブレットを手に絵を見て回っている。

鯉の池の描かれた絵画をボーッと眺めているハルカ。

おもむろに手にしたタブレットを絵にかざすと、タブレットのカメラ越しに絵が見える。

と、タブレット画面上の鯉たちや池の水面が静かに動き出す。

ハルカ「お？」

タブレットを下ろして直接絵を見る

ハルカ。壁の絵に変化はない。

もう一度タブレット越しに絵を見る

と、相変わらずその絵は動いている。

ハルカ「おー」

隣の絵に向かう。今度は公園でくつろぐ人々の絵。

タブレットをかざすと、その絵の世界もまた画面の中で動き出す。

ハルカ「ほえー」

リン「間の抜けた声出してるんじゃないの。

恥ずかしいなあ」

ひっくり返りそうになるハルカ。

ハルカ「うわ！ いたの！？」

リン「いるに決まってるでしょうが。あたしが誘ったんだから」

ハルカ「なるほど……それも然りだな……」

リン「面白い？ それ」

ハルカ「うーん、面白いかなあ」

リン「どっちなのさ」

ハルカ「うーん……そう言われると……」

リン、タブレット上の動く絵を見て、

リン「機械学習と顔認識の応用。言って

みれば絵の世界観をAIに理解させてるわけ。変化の差分も記録するから同じことは繰り返さない。オブジェクトは常に違う挙動を示す。静止した絵の世界を疑似的に生きた世界に変えてるんだよ。それがそのスタンダードってアプリ」

ハルカ「そんなことできるんだ……すご」

リン「すごかあない。面白くもない。何の役にも立ちやしない。こんなの誰の記憶にも残らない低俗な雇われ仕事」

ハルカ「そうかなあ……」

改めてタブレットに視線を落すハルカ。

絵を見ながら歩き出すリンに、ハルカ

はタブレットを見ながらついていく。

リン「で、考えといた？ 進路」

ハルカ「あー」

リン「考えてないよね。そうだと思った」

ハルカ「いや、でも、だって、そんな急に

言われても……」

リン「お姉ちゃん、すぐ決めたよ。お母さん

死んじやって、あーダメだなと思って。

働かなきゃって。印税なんか頼れないから。

あんたもどうせ進学するだろうし」

ハルカ「それはお姉ちゃんの理屈であって

……」

リン「へはい」かへいいえ」しかないんじゃない？ どっちか決めないといつまで経っても前に進めないよ。そうこうしているうちに時間だけが過ぎていく。気付いたらいつの間にか人生しゅーりよー」

むくれるハルカ。

ハルカ「だったらお姉ちゃんだって大学残れば良かったじゃん……量子力学とかやりたかったんじゃないの。自分が上手くいかなかったからって人のせいにして……」

ムツとしてハルカを睨むリン。

リン「なっ……」

何か言おうとするのを必死に堪えて、

リン「は、波動関数の崩壊！」

ハルカ「へっ？」

リン「波動関数の崩壊だな……」

村田の声「(来て) あ、ハカセ。あの――」

リン「ハカセじゃないっつーの！ はいなんですか！」

話しながら村田と去って行くリン。

ハルカ、その背中を眺めて、

ハルカ「壊れてしまった……」

ふと壁の絵に目をやるハルカ。

そこにはブリュール父の『叛逆天使の墜落』のようなゴチャゴチャした構成の絵がある。

ハルカ、タブレットを絵にかざす。

タブレット上で絵の世界が動き出す。

### ○祖母の家・ハルカの部屋(夜)

その動く絵をスタンダールを入れたスマホで見続けているハルカ。

絵の中では子供が誕生したり登場人物同士がケンカしたりしている。

と、画面がフリーズ。

ハルカ「むっ」

画面を何度もタップしてみると反応はない。

ハルカ「どうした」

と、スマホは一瞬バイブして電源が落ちてしまう。

ハルカ「うわ」

電源を入れ直そうとすると、いくら電源ボタンを押しても反応はない。

ハルカ「不良品を押しつけおって……」

ため息についてボンヤリと部屋を眺めるハルカ。

ベッドの上に座ったクロがハルカを見て一鳴き。

ハルカ「スタンダールか……」

ハルカ、何か思い立って立ち上がる。

### ○同・千影の部屋（夜）

小説や漫画本、各種資料で溢れた本棚（その中には石ノ森の全集もある）で

囲まれた他はデスクの上に布を被ったペンタブレットが置かれているだけの殺風景な室内。

ハルカはその本棚に本を探している。

ハルカ「あつた」

取り出したのは千影の著した漫画、

『崩壊のスタンダード』十巻の献本。

その表紙絵は繁華街の中に区画を無視して鎮座する大仏である。

座ってページをめくるハルカ。最初の

ページには「凜と遙へ」のサイン。

ページをめくっていく。

終末時計の描かれたコマ。針が指しているのは10時30分。グロテスク

に身体の変容していく人間の描かれたコマ。国会がちょうど真ん中から切断され、半分は国会議事堂、もう半分は建物が消えてヒマワリ畑になっている風景の描かれたコマ。などなど。

そして最終話の扉。エピソードの題は

「シュレディンガーの手」。その最後のページはこんな展開になっている。白衣を着た女性科学者・小宮（47）が研究の合間にテーブルの上に置かれた〈ネツカーの立方体〉を模した立方体のオブジェをふと見ると、その中に黒猫が入っている。

小宮の台詞「エヴェレット……どうして……」。

黒猫のエヴェレットはオブジェの外に出る。すると、小宮は立方体の手前が奥に、奥が手前に見える錯視を起こす。世界の輪郭が揺らぎ、小宮の意識が遠のいていく。

小宮のモノローグ「異界化が……」。  
シュルレアリスムや抽象絵画のように形を崩していく世界に小宮は巻き込まれていく。それを離れた所から眺めているエヴェレットの黒目がアップになっていって、最後のコマは真つ黒になる。



その下には（崩壊のスタンダード10  
完）の文字。

昌子の声「ハルカちゃん！ お風呂入っちゃ  
いなー」

ハルカ「うーん、入るー……イテッ」

ふと足元を見ると黒猫が足をかじって  
いる。

ハルカ「いつの間に……」

ハルカはコミックを持ったまま黒猫を  
抱えると、部屋を出て自分の部屋に  
戻っていく。

○同・廊下（ハルカの部屋（夜））

ハルカが部屋の扉を開けると中から  
クロが廊下に出てきてどこかへ行く。

ハルカ「もう。おとなしくしててっばあ」

そのまま部屋に入ったところで、

ハルカ、急に動きを止める。

ハルカ「んん？」

振り返って開け放たれたドアを見る。

それから抱いている黒猫を見る。

ハルカ「んんん？」

ドアと黒猫を交互に見る。

と、黒猫が暴れてベッドに飛び乗る。

シヤア、と威嚇の声を上げる黒猫。

困惑して固まるハルカ。

すると、どこからかロック音楽のギタ

ー音と人々のざわめきのような音が

聞こえてくる。

恐る恐る手にしたコミックに視線を

落すハルカ。音はそこからだ。

ページを開くと、漫画はアプリを通し

た時のように生き生きと動いている。

その動く絵を食い入るように見つめる

ハルカ。音は次第に大きくなって……

次の瞬間、ハルカ消失。献本が床に落

ちる。

昌子「(来て) ハルカちゃん、お風呂……

あれ、どこいった？」

○漫画内・ライブハウス（夜）

演奏を中断しているロックバンドのライブ。メンバーが一様に眺めているのは倒れたボーカルの上に覆い被さるハルカの姿。

ハルカはどこからともなくステージに降ってきたのだ。

だが客は意外と冷静で、白けている。

ボーカル「……どいてくれる？」

ハルカ「は……す、すいません！」

ハルカ、赤面して慌ててステージを降りると、逃げるように外へ向かう。

立ち上がるボーカル。

ボーカル「えーと、どこまでだっけ？」

客の野次「異界化始まってんじゃないの」

ボーカル「始まってるのは老化だけだ」

客の笑い声。

○漫画内・繁華街（夜）

地下のライブハウスから階段で地上に

上がってくるハルカ。  
通りに出ると立ち止まり、そこから  
周囲を見回す。

なんでもない都会の日常風景……だが  
その一点にハルカは目を留める。  
パチンコ屋とゲームセンターの間に  
敷地を上書きする形で大仏が出現して  
いて、通りに大きくはみ出たその足の  
部分の周囲に、工事用のフェンスが  
張られているのだ。  
その光景を日常として受け入れる通行  
人たちの波に逆らって、ハルカは呆然  
と大仏を眺める。

○祖母の家・玄関（日替わり）

玄関ドアが開いて、スーツ姿のリンが  
家に入ってくる。

昌子「あらリンちゃん久しぶり」

リン「あらリンちゃんじゃないでしょう。」

あの子がいなくなっただって言うからこつち

は仕事抜け出してきたのに。で、どういうこと？」

昌子「さあ、どういうことだか。皆目」

リン「(呆れて) ハルカ、おばあちゃんに似たよねえ」

足元を見るリン。ハルカの靴がある。

リン「靴はあるな。じゃ自分でどこか出かけたんじゃないか。ねえ本当にいなくなったの？ 家中探した？ なんかそこらへんに転がってたりしない？」

昌子「オモチャじゃないんだから」

家に上がって探して回るリン。

リン「ハルカー。ねえいないのー」

○同・ハルカの部屋

スクールバッグを見つけるリン。

リン「バッグもあるか」

スマホを出してハルカにかけるリン。

部屋のどこかから着信音。

音のする方を見ると、ベッドの下に

ハルカのスマホが落ちている。

スマホを拾ってスリープ状態を解除するリン。

リン「ロックぐらい掛けときなよもう」

今日の日付で着信が何件も入っている。全てリンからの電話。

リンが履歴を遡っても他の番号はほとんど出てこない。へおばあちゃん〓とへお姉ちゃん〓ばかり。

リン「つたく、どこ行ったのさ……」

リンは床に落ちた『崩壊のスタンダード』十巻の献本には目もくれないで部屋を出て行く。

## ○同・千影の部屋

ドアを開けるリン。

黙々とペンタブレットで漫画のネームを描いている千影の背中が見える。

いつの間にか、そこにいるのは今のリンではなく高校時代のリン。

高校生リン「ねえお母さん。あのさ——」

千影「後にしてくれない今忙しいから」

高校生リン「学校の——」

千影「聞こえなかった？　今忙しいの」

振り向きさえしないで答える千影。

高校生リンは今度はいつの間にか現代のリンに代わっている。

その寂しげな乾いた眼差しが捉える

のは、今は誰も使わない千影の作業机。

クロを抱いた昌子がやって来る。

昌子「ねえリンちゃん、大福とロールケーキがあるんだけど、どっちがいい？」

リン「どっちもいらない！　今それどころじゃないでしょ！」

昌子「（クロに）そうカリカリしなくたっていいのに。ねえ」

クロが一鳴き。

昌子「カリカリ食べる？」

リン「だめだこりゃ」

玄関ベルが鳴る。

○同・玄関（外側）

リンがドアを開けると大柄な男・

ふわふわにゃんこ（28）（以下、

ふわにゃん）が立っている。

俯いてオドオドするふわにゃん。

睨みを利かせるリン。

リン「誰？」

ふわにゃん「……」

小柄な男・牧野（35）がふわにゃんの腰を持ってどかさうとする。

牧野「はいどいてね。ごめんね」

横にどくふわにゃん、牧野が前に出る。

牧野「すいません、人見知りが激しくて。ま、

俺もつい先ほど会ったばかりで——」

リン「あのどちらさまですか」

牧野「香田ハルカさんでしょ？ 牧野です。

彼、誰だと思えます？ ふわふわにゃんこ

ですよ。彼が。ねえ。ふわにゃん」

牧野とふわにゃん、顔を見合わせて



不気味に笑い合う。

ボタンとドアを閉めるリン。

笑いを止めてキョトンとする二人。

牧野「俺なんか変なこと言った？」

首を横に振るふわにゃん。

牧野「言っていないよね？」

牧野、ふわにゃんを小突く。

牧野「ちよつとふわにゃん。ふわにゃんの

せいで怪しまれちゃったんじゃないの？」

激しく首を横に振るふわにゃん。

牧野「空気が読めないなふわにゃんは。

そんなんだから彼女もできない——」

急に玄関ドアが開いて牧野は顔面を

強打、顔面を手で押えてうづくまる。

リン「ハルカって言った？」

ふわにゃん、牧野を見ながら首を縦に

振る。

### ○同・応接間

テーブルに置かれたロールケーキを

物欲しそうに見ているふわにゃん。  
鼻に絆創膏を貼った牧野がその横に  
座っている。

腕組みして二人を見ているリン。

リン「どうぞ。召し上がってください」

ロールケーキを食べるふわにゃん。

リン「美味しい？」

笑顔で頷くふわにゃん。

リン「それはよかった」

牧野、恨めしそうにふわにゃんを見る。

リン「で、お二人はハルカとどういう関係

なんでしょうか」

牧野が何か言う前にふわにゃんが

何か言うが、ケーキのせいでモゴモゴ

して聞き取れない。

リン「え、なんて」

牧野「招待されたんですよ。俺たちは」

不満げにケーキを頬張る牧野。

牧野「そうとわかったらこんな無礼な扱いは  
やめていただきたいな」

リン「いやわかってないから」

牧野「だからね、俺たちは千影さんの漫画のファンなの。ね。あなたハルカさんのお姉さんってことは千影さんの娘さんでしょ。

俺だってこんな無礼な態度取りたくないですよ。尊敬する人の娘さんですよ。

そりやもうね、敬意を持って――」

リン「だから結局なんなわけ？」

ふわにやん「ハルカさんから最終回を考えようって誘われたんです。千影さんがあんなって未完に終わってしまった『崩壊のスタンダード』の。僕たちネットに千影さんの二次創作アップしてて」

○同・ハルカの部屋

『崩壊のスタンダード』十巻の献本を  
拾い上げるリン。

リン「ああこれかあ……はい」

興味なさそうにコミックをふわにやんに渡すリン。

嬉しそうに読み始めるふわにゃんと、  
その周囲をびよこびよこしながら  
本を覗き込む牧野。

ふわにゃん「うわあ。サイン本だ」

牧野「献本？ 献本？」

リン「ええ、そうですが何か」

牧野「そうですが。あんた自分の言っていることがわかってないな」

リン「逆にお前に何がわかるんだ」

牧野「不世出の天才漫画家・香田千影が魂を削って書き上げた絶筆の著者献本、しかも娘へのサイン付きですよ！ そりやはしやぎもするでしょ！」

リン「へえ、そんな価値あるものなんだ。

コミックスは売れないし打ち切りの常連だったのに。アニメイトに売れるかな」

牧野、ふわにゃんから献本を奪い取る  
と、本を叩きながらまくし立てる。

牧野「あのね！ あなただって読んだでしょ

うこれ！ 『崩壊のスタンダード』！

傑作ですよ！ 一部では『生物都市』以来の日本SF漫画のエポックと言われているし、その緻密かつサスペンスフルなストーリーテリングから現代の『11人いる！』とも評価されている！ 香田千影をこのジャンルでは諸星大二郎や星野之宣と並ぶ才能とする声もある！」

リン「読んだことないんだよね」

牧野「ないんかい！」

リンとふわにゃん、沈黙。

牧野「ないんかい！」

リン「帰れ」

牧野「すみませんまだちよつと居させてください」

### ○漫画内・公園

器用に身体を折りたたんでベンチで寝ていたハルカが目を覚ます。

牧野N「それは南米チリの虫害から始まった。

被害は甚大。範囲は広大。史上稀に見る

大虫害。農薬を撒くか？　だがその相手は地元農家が今までに見たこともない、アリとハチの合いの子のような奇妙な虫だ。撒くといっても何を撒けばいいのかわからない、撒いたところで効果もない。

そこで国連食糧農業機関の対策チームは虫のゲノム解析を試みた。ゲノム情報が分かれば有効な殺虫剤を開発できるかもしれない。だがその結果、チームが発見したのは思いもよらぬ事実だった。

その虫は新種であるばかりでなく、そのゲノム配列からいって、新生代に絶滅したアリの仲間テイタノミルマの系統樹上の進化形としか考えられなかったのだ」

遊具で遊んでいる子供たちをよそに、その母親たちが不安そうに同じ方向を眺めている。

公園の外を中学生男子が走り過ぎる。

後続の仲間たちに向かって、

中学生男子「異界化！」

母親たちはおもむろに、子供たちを連れて公園から出て行こうとする。ハルカ、立ち上がって中学生男子の向かった先に行ってみる。

### ○漫画内・住宅街

人だかりに近づいていくハルカ。人々はスマホで何かを撮影している。スマホカメラが捉えているのは一軒の家が土台から朽ちた廃墟に変異していく様子。家の住民らしき人間が慌てて外に出てくるのが見える。覆面パトカーがやってきてハルカの背後に停まる。と、異界化が隣の家にも及んで、更には道路にも拡大していく。

野次馬 1 「でかいでかい！ やばい！」

逃げていく野次馬たち。

その肩に当たってハルカ、倒れる。

近づいてくる異界化。目の前はその  
エリアだけ空襲にでもあったかのよう  
になっている。

男の声「ほら、早く逃げないと！」

眉目秀麗なハーフの男がハルカの  
手を引く。

ハルカ「あ……（指差して）アンドリュウ

山中！」

山中「ええ？ とにかく早く！」

ハルカと山中、覆面パトカーに乗り

込んで、車がバツクで発進する。

バンパーが異界化に接触して朽ちるが

すんでのところで異界化から逃れる。

それから異界化の拡大は鈍化して、

やがて止まる。

○漫画内・覆面パトカー車内

運転する山中を助手席からボーッと

見つめているハルカ。山中は気まず

そうにチラチラとハルカに目をやる。



山中「あの……なに？」

ハルカ「立体だとこんな感じなのか……」

山中「立体？」

ハルカ「うーん」

見つめながら何か考え込むハルカ。

山中「なんなんだ……」

○祖母の家・ハルカの部屋

自分の世界に入り込んで熱っぽく話している牧野。

牧野「それから世界は終わりへ、あるいは

始まりに向かって歩み出す。未知の素粒子

の相次ぐ検出、死んだはずの人物の出現、

突如として現われた変異ウイルス、蘇る

第三帝国の妄執！ 人々はこれを異界化と

呼んだ！ 原理は不明だがどうやら無数の

パラレルワールドの断片がこの世界を部分

的に侵食し始めたらしいのだ！ 主人公の

刑事・アンドリュース山中はそんな状況に

翻弄されながら最愛の妹を殺した犯人を

追うのだが、彼を待ち受けていたのは思いもよらぬ残酷な運命であった……まあ未完だから本当に残酷だったのかどうかはわからないが」

リンが部屋の入口に立っている二人の人物、平凡な会社員風の男（38）と上下スウェットのズボラ女（30）を冷たく観察している。

リン「誰ですか」

テロップが出る。男の方に

T…DJ味噌田楽

女の方に

T…超絶弩級破壊神魔王 G.O.D.

（以下、それぞれ田楽、G.O.D）

牧野が二人をリンに紹介する。

牧野「DJ味噌田楽。それから、彼女は超絶弩級破壊神魔王 G.O.D.として知られているネット絵師だ」

リン「まだ増える？」

牧野「人をアメーバみたいに言うな」

田楽「あの……なんか、心なしか空気が

重いような気がするんですけども……」

リン「よし、さっきのストーリー解説に引き

続いて説明は牧野くんに任せた。尋問は

それからだ」

田楽「尋問？」

牧野「これには深いわけがあつてな……」

深く頷くふわにゃん。

G O D 「うわうっぜ」

### ○漫画内・喫茶店

山中とハルカが席で話している。

山中「なるほど。大体は分かったよ。そうだ

なあ、なんと言うべきか……」

ポケットに何か探す山中。

ハルカ「タバコはいつも車に忘れます。銘柄

は……なんだったかな。マルメロ？ それ

で、まあ禁煙になるからいいやつて……

いつもそんな感じで……」

山中「君はそれを読んだわけだ。俺と、それ

からこの世界も漫画で、描いたのは君のお母さんか。それも一つのパラレルワールドかもしれないな。ホログラム仮説って知ってるかい？ それによればこの世界は二次元から浮かび上がった立体像なんだそうだし。三次元の存在に見える映画のCGだって煎じ詰めれば0と1の列に還元される平面的な情報の束に過ぎない。この手だってペンで描かれたものなのかもしれないな」

自分の手を眺める山中。

それからコーヒーを飲む。

山中「だが確証はない。タバコの話もさつき車に乗っている時に見て思いついたのかもしれない。この世界が君の言うとおり漫画であるのと同じくらい、君が単なる家出少女の可能性もある。さて、俺が君にしてあげられることはなんだろうね」

ハルカ「ホログラム仮説……小宮博士が言うてたな……そうだ小宮博士！」

○祖母の家・ハルカの部屋

リン以外の全員が座って大福を食べている。

リン「それで、最後に連絡を取った人は？」  
間。

田楽「確かこの間の木曜日が最後だったと思います」

牧野「俺も」  
ふわにゃん「(頷く)」

GODを見るハルカ。GODは会話には加わらずスマホを見ている。

リン「あなたは？」

GOD「事件でしょ。誘拐。監禁。殺人」

牧野「GOD、口を慎まないか」

GOD「なんでテメェに指図されなきゃいけないんだよ。リアルで初対面だろ」

田楽「まあまあ、ね、色々ありますから」

GOD「ねえよ死ね」

献本を印籠の如くかざす牧野。

牧野「千影漫画の読者に悪人はいないと思っ

ていたが、とんだ間違いだったよ」

GOD 「権威を笠に着るんじゃないやねえよ糞が」  
リン「(ため息) ダメだこりゃ」

田楽「まあ、あの、ここで今口論してもしょうがないですから、ちよつとみんなでもしよてみましょうよ。まず状況。状況を整理しましょう」

立ち上がって窓辺に向かう田楽。  
窓を開けようとするが、開かない。

田楽「このとおり窓は内側から鍵がかかっています。したがって何らかのトリックを使ったのでなければ、何者かがここからハルカさんを連れ去ったとは考えにくい」

田楽、部屋の入り口に移動して、

田楽「あちらの和室にはお婆さんがいます」

昌子と会釈する田楽。

田楽「そしてリンさんの(牧野の顔色を窺って)……牧野さんの説明によれば、

お婆さんが最後にハルカさんを見たのは彼女が飼い猫のクロちゃんを抱いてこの

部屋に入る時です。つまりこれは密室です。  
この密室でハルカさんはどこかへ消えた。  
ハルカさんの靴が玄関に残されていたこと  
もこの説を裏付ける傍証でしょう」

牧野「さすが理屈のD J味噌田楽。普段は  
ふざけたツイートばかりしているが、いざ  
という時には頼りになるな」

ふわにゃん「(頷く)」

田楽「はあ、どうも」

G O D「お前は何ポジションなんだよ」

牧野「残されたのはこの本か」

献本をデスクに置く牧野。

牧野「どこへ消えたんだ……香田ハルカ」

G O D「かっこつけて言うんじゃないやねえ死ね」

田楽「G O Dさんめっちゃ当たり強いですね

……」

○漫画内・研究所の外

覆面パトカーが研究所の前に停まる。

○漫画内・研究所のロビー

受付に話をつけている山中。

ハルカは待合スペースに座って壁に  
掛けられたシウルレアリスム絵画を  
眺めている。

山中「(来て) 時間が空き次第来るってさ。

君の話も伝えておいたよ。オブジェが異界  
化して博士も巻き込まれるって。信じちゃ  
いないだろうが、まあ、警察特権だ」

ハルカ「あ、ありがとうございます……」

山中「(座って) ところで、この世界が漫画  
だとして、最終回はどうなるんだ」

口ごもるハルカ。

ハルカ「あの……そこで終わりです」

山中「そこって、どこ」

ハルカ「博士が異界化に巻き込まれて……」

山中「(笑) そりゃ、またえらい無責任な

エンディングだね」

ハルカ「あの、お母さん連載途中で死んじゃ  
ったんです。この世界にはない病気に罹っ



てしまつて……」

山中「そうか。ごめんね」

ハルカ「いえそんな……」

山中「どんな人？」

ハルカ「はあ、漫画ばっかり描いてました」

山中「漫画家だもんね」

ハルカ「そうですね……」

ハルカの表情から何かを察する山中。

○祖母の家・ハルカの部屋

自前のタブレットを見ていたふわにやんが何か気付く。

ふわにやん「あ」

牧野「どうした、ふわにやん」

ふわにやん「やっぱり」

牧野「それは質問の答えじゃないだろう」

リン「どうしたの？」

ふわにやん「これ、見て下さい」

タブレットを部屋の全員に見せるふわにやん。ディスプレイに映っている

のは電子書籍版『崩壊のスタンダー  
ル』十巻の、住宅街が異界化して廃墟  
になる場面。

ふわにゃん「さつき献本を読んで思ったん  
ですが、電子書籍版だとこの群衆の背後に  
いるはずの女の子がいないんです」

献本を開いて電子書籍と見比べる牧野。

牧野「どれ…：あ本当だ」

田楽「修正ですかね？ 確かに居ない方が  
絵のバランスは良いですね。初版本だけ  
違うのかな」

GOD「香田千影はそんなことしない。どん  
なに失敗した絵でも発表されたら完成形と  
インタビューで言ってる。漫画ナタリー  
2020年3月26日の配信記事」

リン、献本を覗き込んでギョツとする。  
小さく描かれてはいるが、それは紛れ  
もなくハルカだ。

リン「まさか…：ないない…：」

頭を横に振って献本から離れるリン。

献本をめくっていた牧野が声を出す。

牧野「なあ、狂ってると思われるかも知れないが、ちよつと聞いてくれないか」

GOD「いやもう思ってるから」

終末時計のページを開いて全員に

見せる牧野。その針は11時過ぎを指している。

牧野「さつき見た時、この終末時計は確かに前と同じ10時30分だった。今は11時過ぎだ。この本は動いてる」

終末時計のコマを見つめる全員の前で、針は11時5分を指す。

ふわにゃん「リンさん、さつき何か――」

リン「ありえない。物理法則に反してる。

そんなことは絶対じゃない」

牧野「あんたが言えないなら俺が言おうか。

香田ハルカは消えたんじゃない。この本の中に入ったのだ！」

間。

誰ともなく笑い出す一同。

誰も何も言えず、ひたすら笑う。

リンも笑う。献本を持ってその1コマを指しながらバカ笑い。

と、リンが消える。

全員「うそおおおお！」

○漫画内・キャバクラ

接客中のキャバ嬢と上機嫌で笑っているオッサン客の間に出現するリン。

リン「……仕事のしすぎかな」

オッサン客「お、新しい娘？」

リンの太ももに手を置くオッサン客。

リン、振り返ってオッサン客に頭突き。

オッサン客、倒れる。

リン「病院に行こう……」

○漫画内・研究所のロビー

小宮博士が出てきて受付と何か話す。

その後ろ姿は在りし日の千影とよく似ている。

小宮、振り返って山中を見る。

ハルカ、それに気付いてぽーっとした表情で小宮を見つめる。

小宮「(来て) 忙しいとお伝えしたはずですが」

山中「いやあ、どうもすいません。先生の研究にもご協力できるかと思ひましてね」

小宮「できません。何の捜査なんです」

山中「まあ、その子に聞いて下さいや。

私は仕事がありますからここらへんで

おいとまします」

ハルカ「え」

小宮「はあ？」

ハルカにウィンクして去って行く山中。

ハルカ「や、山中さん！ 体育館に行つて

下さい！ 不明渡航者の一次収容所！

そこにあなたが探している人が……」

山中、立ち止まるが振り返らない。

ハルカ「でも、それはあなたが探してる人

とは別の人なんです……それが最終回

なんです……」

山中、再び歩き出して、振り返らずに  
手を振る。

小宮「なんなのよ……あなた誰？ 何者？

何の用？」

ハルカ、胸をなで下ろして、笑顔で、

ハルカ「性格まで似てる」

怪訝な表情でハルカを見つめる小宮。

と、非常ベルが鳴る。小宮、舌打ち。

小宮「この忙しい時に」

廊下を走ってくる警備員を小宮が呼び

止める。

小宮「ねえ、何！ どうしたの！」

警備員「異界化みたいです。3階西」

小宮「規模は」

警備員「一旦退避した方がいいですよ。大き

いかもしれない」

小宮、イライラとため息。

ハルカ「3階西……博士がいつもいるところ、

ですよね？ 危なかった……」

小宮、嫌味っぽく、ハルカを見ずに  
小宮「命の恩人ね」

○祖母の家・ハルカの部屋

献本を読んでいる田楽。

田楽「あ、いたいた。ほらここ、キャバクラ  
のコマ」

GOD「すげえ、ガチで入ってるじゃん」

牧野「おいおい、閉じとけ！ 閉じとけ！

終末時計が進むかもしれないだろ！」

献本を閉じる田楽。

田楽「関係あるかなあ。どうも作中とこっち  
の世界で時間の流れが違うような気がする  
んですよねえ、この進み方だと」

牧野「そんなの知らないよ！」

田楽「それに終末時計が12時になったら  
どうなるんです？」

牧野「それも知らない！」

田楽「そもそも何が起こってるんです？」

牧野「だから知らねえつつってんだろ！」

G O D 「テメェに期待してねえよ黙ってる」

牧野 「だけどな、これはあくまで仮説だが」

G O D 「言うのかよ」

牧野 「俺は小学生の頃からずっと一人も友達がいなかった。今はもう慣れたものだが、それが辛くてどうしようもない時には漫画の世界に逃避したものだ。そうするとな、なんだか俺が俺じゃないような気になってくるんだ。この世界がこの世界じゃないように感じられてくるし、自分が漫画の中生きて、漫画の世界の住民たちと会話をしたり、一緒に遊んだりしているような気がしてくる。ある時には登場人物の一人が俺のクラスに転校してさえきたんだ。彼女は俺の初めての恋人になった……みんなもそんな経験、あるだろう？」

沈黙。

田楽 「いや、それはさすがに……」

ふわにゃん 「(首を横に振る)」

G O D 「病院に行け」



牧野 「諭え話だよ！」

G O D 「後半諭えじゃなかったろ」

牧野 「とにかく！ 現にだ！ こういう現象が起きているんだ！ あの姉妹は千影先生の娘だろ！ なんだかんだ言っても『崩壊のスタンダール』への思いは一読者の俺たちよりも強いはずだ！ つまりよ！ 入りたいと強く念じればこの中に入れるんじゃないかと思う！ どうだ！ 試してみよう人間は！ いないか！ 『崩壊のスタンダール』に入りたい奴は！ じゃあ俺がやるぞ！」

    献本を奪い取って瞑想の姿勢でページに精神を集中させる牧野。

    若干引いた様子で牧野を眺める一同。

    何も起きない。

    少し経ってもやはり何も起きない。

牧野 「なんでやねん！」

    献本を床に叩きつける牧野！

    ふわにゃん「ああ！」

慌てて本を保護するふわにゃん。

G O D 「お前貴重な著者献本になにしてくれてんだよマジ死ねよ」

牧野 「なんでだ……なぜ入れない……俺はな、もうこんなつまらない現実世界なんかウンザリなんだ……35歳……コンビニバイト……甲斐性もなければ将来性もない……飼っていたグッピーも死んでしまった……俺が餌代をケチってエサやりを二日に一回にしたばかりに……」

田楽 「あのう、牧野さんも色々その、大変なこともあるかと思うんですが、とりあえず今はあの、中に入った二人をどうにか救出する方法を考えた方がいいんじゃない、かなあ？ みたいな……」

牧野 「……そうだな」

沈黙。

ふわにゃん 「ちよっと発想が飛躍するかもですが、出口を描けばもしかしてって」

G O D 「なに出口って」

ふわにゃん「最終回、小宮博士が異界化に

巻き込まれるところで終わりますよね？

それで、その先はどうなったかわからない

……たとえば、異界化の先にこの世界、

今ぼくたちがいるこの現実世界を描けば、

そこを通ってハルカさんとリンさんは

戻ってこれるのではないでしょうか……

僕たちは『スタンダード』の最終回を描く

ために集まりました。そのタイミングで

こういうことが起こって……そのお、なん

ていうか、宗教じみてるかもですが、天国

の先生は描いて欲しいんじゃないかなって

思うんです、最終回を」

牧野「それだあああああ！！！！」

セロテープの台で牧野を殴るGOD。

牧野は頭から血を流して倒れ、沈黙。

GOD「たとえ失敗したものでもそこに存在

し続けるのなら存在の価値を持つ。存在の

権利と言った方がいいかもしれない。それ

は誰も否定することができない。だから

失敗を恐れずになんでも試した方がいい。  
失敗は存在しない。あるのは結果と、その  
存在だけだ。『スタンダード』コミックス  
1巻のカバー折り返し作者コメントだ。  
なんでもやってやろうじゃないの」

牧野「(起き上がり) そうだ！ なんでも  
試す！ 先生の教えだ！」

田楽「生きてた」

○漫画内・メンタルクリニック・診察室

医師の診察を受けているリン。

医師「面白いですよねえ。妄想だっという

自覚はあるんですもんねえ」

リン「そうなんですよ。妄想ってというか……  
白昼夢というか……とにかくすごくリアル  
な世界で……今までずっとそこにいたよう  
な気がする……」

医師「何か、やっぱり心理的なプレッシャー  
があったのかしら」

医師「その、なんでしたっけ？」

リン「COVID-19. 新型コロナウイルスです。

ひどい肺炎を引き起こすウイルスで……」

医師「その病気が世界的に流行して、それでその病気に罹ったお母さんが亡くなっちゃったわけだよ、あなたの妄想の世界では。

未完の漫画を残して」

リン「そうです」

医師「その時どう思いました」

リン「うーん、なんだろう。特になにも。

ただ、大学辞めて働かなきゃって」

医師「妹さんの将来もありますもんね」

リン「はい」

医師「お母さんになろうとしたのかな？」

リン「私ですか？」

医師「うん、そう」

リン「どうかな……特に考えたことはないです」

○病院の陰圧室（回想）

新型コロナウイルスの重症患者たちが収容され

ている。

その病床の一つに人工呼吸器を付けた千影の姿がある。意識はない。

部屋のガラス窓の向こうにサージカルマスクを着けたリンとハルカが看護師と共に立っていて、無言で千影を眺めている。

○漫画内・メンタルクリニック・診察室

医師「こっちの世界のお母さんとは、どう？

関係は」

リン「それが不思議なんですけど、ないんですよね、家。関係以前に家がなくて、だから、どこにいるのかも分からないんです。

職場もないし、なにがなんだか」

医師「香田さん。さつきからお話を聞いているとどうも、あなた例の異界化でこっちの世界に入ってきたちゃった不明渡航者じゃないかと思うんですよ。妄想じゃなくて」

リン「なんですか異界化って。そんな非現実

的なこと起こるわけないじゃないですか」  
医師「いやでも、現にさ……私だって、これが全部妄想なんじゃないかって思うときはあるよ。妄想ならいいのにつてね」

デスクの下に隠していた片手を見せる  
医師。その手は半魚人のように変形している。

### ○漫画内・研究所の外

やってきた警官たちが建物周辺の封鎖にかかっている。

避難してきた職員たちは規制線の外から建物の異界化を見守っている。

変異は緩慢だが止まることなく続く。

徐々に、研究所が宇宙空間と化しているようだ。

ハルカと小宮もそれを眺めている。

小宮「いよいよ終わりかもね。今度のは時間が長い」

ハルカ「あれ……なんだろう……」

小宮「宇宙っぽく見えない？ 地球が存在

しなかったパラレルワールドが現われてるのかも。そしてそれに現世界は呑み込まれてしまう。言ってみれば波動関数の崩壊だね。重ね合わさったいくつもの可能性もやがてひとつの状態に固定される」

ハルカ「波動関数の崩壊……ああ、そういう意味でのタイトルか……」

小宮「そうなの？ なんだか知らないけど」

ハルカ「あの……博士はこれからどうするんですか」

小宮「さあね。設備は使えないし。当面することもない。あるいはずっとないかも」

ハルカ「じゃあ……観光しませんか？」

小宮「そもそもあなた誰なの？ 不明渡航者って聞いたけど」

ハルカ「……はい。でも、どんな世界かは言っても信じないと思います……」

小宮「ふうん。まいつか」

小宮「で？ どこ行きたい？」



歩き出すハルカと小宮。

○祖母の家・ハルカの部屋く廊下

他の三人に指示を出している牧野。

牧野「ふわにゃんは絵！」

自前の小さいペンタブに絵を描きながら  
頷くふわにゃん。

牧野「千影先生と同じ絵を描くんだ！ 田楽  
はストーリー！」

持参した『崩壊のスタンダード』コミ  
ックス全十巻を読みあさっている田楽。

田楽「考えてますよー」

牧野「いかにも千影先生が描きそうなストー  
リーを考えるんだ！ GODは世界観  
考証！」

雑誌やプリントアウトしたネット

記事等の資料に埋もれているGOD。

牧野「できるだけ千影先生の精神に近づけ  
るんだ！」

GOD「だからテメエは何ポジなんだよ」

牧野「みんな頑張れ！　頑張るんだ！」

田楽「あ」

牧野「どうした！」

田楽「ちよつと思っただんですけど、仮に

我々が最終回を描いたとして、どうやって  
この本と繋げるんですかね？」

間。

G O D 「破ってくつつければいいんじゃない？」

田楽「ああ。えー」

G O D 「だってしょうがないじゃん」

田楽「いいのかなあ、勝手にそんなこと

して」

G O D 「所有者が中にいるんだから許諾の  
取りようがないし」

牧野「G O Dの言うとおりだ。確かに残酷な  
ことかもしれない。しかし破壊なくして  
創造なし。俺が思うに――」

ぶるぶると震えていたふわにゃんが

突然、献本を持って廊下に駆け出す。

ふわにゃん「い、嫌だああああ！」

牧野 「ふわにゃん！」

追いかける一同。ふわにゃん、飛び出してきたクロに驚いてずっこける。

ふわにゃん 「だばあ！」

押さえ込む田楽とGOD。三人の周囲であたふたしている牧野。

田楽 「仕方がないんだって！ 二人を救うためなんだって！」

ふわにゃん 「嫌だよお。この世に一冊だけのサイン入り著者献本ですよお」

献本を抱いて泣き出すふわにゃん。

全員、なんとかしてふわにゃんから献本を引き離そうとする。

クロを抱いた昌子がやってくる。

昌子 「なんだか騒がしいけれども……」

牧野 「すいませんうるさくて！ 大丈夫

です！ なんでもないです！ 仲良し！  
ふわにゃん 「ロールケーキが食べたあい！」

○漫画内・体育館（夕）

〈不明渡航者相談センター〉の仮設  
看板が外に立てられている。

防護服姿の職員が拡声器で同じ文言を  
繰り返している。

職員「不明渡航者の方には簡単な感染症検査  
を行っています。検査をクリアした方から  
生活相談を行っていますので、先に検査の  
受付をお願いします」

体育館内に設けられた仮設テントでは、  
職員が忙しなく検査をしているが、  
対象者の多さにとっても追いつかない。  
そこは格好も姿形も様々な人間や亜人  
間でいっぱい。全員、検査と相談の  
順番を待っている異世界からの渡航者  
その中に魂の抜けたような表情のリン  
もいる。

自衛隊員「ここは平和だ」

隣に座っている迷彩服の陸上自衛隊員  
が独り言のようにリンに話しかける。

自衛隊員「昨日までは前線にいたのに、ここ

には前線そのものがない。部隊も、家も、金も、自分が何者かの存在証明もない。これが平和なんですか？」

自衛隊員がソ連国旗の記章をつけているのがリンの目に入る。

リンの目を見つめる自衛隊員。

リンが黙って顔を背けると、自衛隊員は反対側に座っている男に話しかける。

リンは居心地悪そうに待合スペースの一角に置かれたブラウン管テレビに視線を移す。

山中が体育館に入ってきて、中の人々を一望する。

職員が慌てて駆け寄ってくると、山中は警察手帳を見せて、

山中「警察だ。人を捜してる」

○漫画内・商店街（夕）

冒頭でハルカが訪れたのと同じ商店街だが、こちらはシャッターの降りた店

も少なく、活気がある。

そこをハルカと小宮があてどなく歩いている。

ハルカ「どこもやってるな……すご」

小宮「このあたりは異界化の発生が少ないから。孤発例はあっても連鎖発生は見られない地域」

ハルカ「いえあの違うんです。私の世界だとこのあたりはもつところ……人も店も少なくて。みんなダメになっちゃったので」

小宮「例のウイルス？」

ハルカ「そうです、そうです」

小宮「ふーん、映画みたいな話だね。信じられないや」

ハルカ「でもこつちの世界の方が……」

小宮「そうね」

営業中の〈エチゴヤ〉を見つける

ハルカ。

ハルカ「あっ！」

軒先に駆け寄るハルカ。

ハルカ「ここもまだあるんだ……」

カウンターで死んだように寝ている

店主の老人を見て、

ハルカ「生きてる……」

小宮「(来て) あれ生きてるの? 死んでるんじゃない?」

ハルカ「(笑) 昔からそうなんです。だからあだ名はシュレディンガーで……」

小宮「酷いあだ名」

ハルカ、十円ゲームに近寄る。

ハルカ「懐かしいなあ……昔よくお姉ちゃんとやってたんです」

小宮「(十円出して) はい。両替してくる

からとりあえず十円」

ハルカ「いやいやいや、そんな!」

小宮「十円ぐらいで恐縮されたくないよ。

私がいくら稼いでると思ってるのよ。甘く見ないでよねー」

店に入って駄菓子を物色する小宮。

笑って十円ゲームを始めるハルカ。

○祖母の家・ハルカの部屋（夕）

ロールケーキを食べながら各々に割り振られた仕事に熱中している一同。

田楽「あの、一ついいですか？」

牧野「今度はなんだ」

田楽「我々こうやって一から最終回考えますけど、ぶっちゃけ、みんなそれぞれネットに上げた二次創作最終回があるわけですし、ハルカさんもそれを見て我々に声をかけてくれたわけですから、単にそれを印刷すればいいんじゃないですかね」

沈黙。

牧野「GOD」

GOD「殺すぞ」

牧野「終末時計は何時だろう」

献本を開いて該当ページを見るGOD。

GOD「5時15分」

田楽「戻るんかい」

牧野「なんだか知らんが時間はあるな」



○コンビニ（夜）

コピー機を独占して延々と印刷している牧野たち。

牧野「フライドチキン買ってくるけど、

欲しい人いる？」

ふわにゃん「（頷く）」

田楽「あ、じゃあ私も」

G O D 「辛い方」

○漫画内・墓地の前（夜）

小宮とハルカ、歩いているうちに墓地の前までやってくる。

ハルカ「あ」

小宮「ん？」

ハルカ、来た道を引き返そうとする。

ハルカ「そうだ、まだ行きたいところが

あったんだった」

小宮「ねえ、そういうのやめた方がいいよ」

ハルカ「はい？」

小宮「なんでか知らないけどあなた知ってるんでしょ。ここ。娘のお墓」

ハルカ「えへへ……」

小宮「二人とも私のせいで死んだようなものだからねー」

ハルカ「そんなことないです……」

小宮「いいのよ。過去の事は過去の事だから。とつくに自分でケジメはつけてる。

あなたに気を遣われる謂われはない。

見てく？」

ハルカ「いえ……」

小宮「私が墓参りをしないのは死後の世界を信じてないからっていうだけ。それ以上の理由はないし、それに、生きてる人間が死者にあれこれ縛られるなんて、かえって死者への冒瀆になると思わない？」

ハルカ「……死者の世界は信じないのに、

死者の冒瀆は気にするんですね」

小宮「(苦笑) そう、矛盾してるね」

○漫画内・体育館（夜）

検査を待つ不明渡航者たちの中に誰かを探している山中。

と、頭を抱えてぶるぶる震えている一人の男の前で立ち止まる。

山中「佐久間。佐久間真一郎」

震えていた男、顔を上げて山中を見る。

佐久間「どちら様ですか？ 私を知っているんですか？」

山中「俺を忘れたか。俺は忘れない」

佐久間「何を言っているんです？」

隣の女「違う人だよ。ついさつき一緒に来たからね。パラレルワールドだかなんだか知らないけど。巻き込まれたんだ私たちは」

山中「佐久間真一郎は俺の目の前で俺の妹を殺した」

山中を見つめて冷や汗をかく佐久間。

佐久間「知らない。そんなことしない」

山中、ホルスターから拳銃を抜いて、静かに佐久間の額に銃口を押しつける。

事態に気付いた隣の女は面倒臭そうに  
佐久間から離れていく。

×

×

×

リンの居場所――

テレビに研究所で起きた異界化のニュースが流れる。その中の、研究所職員  
の一人がスマホで撮影した現場映像に、  
ハルカと小宮がチラと映り込む。

リン「ハルカ……！」

リン、居ても立ってもいられずに外に  
向かって歩き出す。

×

×

×

山中の居場所――

山中「この世界のお前はやったんだ。お前  
が殺したんだ」

佐久間「知らない。そんなことしない。

人なんて殺さない！」

トリガーに力を込める山中。

と、仮設テントから狂ったような叫び  
声を上げて一人の男が走り出てくる。

山中とリン、それぞれ声のした方に  
振り返る。

うずくまる男に職員が駆け寄ると、  
その膨れ上がった背中から大きな甲虫  
の足が生えてきて、男は仰向けの状態  
で走り回りながら、職員や他の不明  
渡航者たちに襲いかかる。不明渡航者  
の他の何人かも同じように変態を始め、  
体育館はパニック。

### ○漫画内・公園（夜）

ベンチに座って袋いっぱい駄菓子を  
食べる小宮とハルカ。

遠くには今や研究所跡地となった、  
拡大を続ける宇宙空間が見える。

ひっきりなしに飛び回る報道ヘリや  
自衛隊のヘリ。辺りは静かだが、街は  
騒がしく、崩壊の予感に包まれている。

小宮「不思議ね。なにもかも終わってしまう  
かもしれないのに、実感がなにもない。

あなたの世界もそうだった？」

ハルカ「……」

小宮「比べることでもないか」

ハルカ「あ、いえ、似てるかもしれませんが

……でも新型コロナウイルスは収まりました。時間  
はかかったけど」

小宮「こっちは収まりそうにないわね」

ハルカ「でもそれで、お母さんは死んじやい  
ました」

小宮「ふうん。で？ 私、わざとらしく同情  
とかしないよ」

ハルカ、笑みを浮かべて、

ハルカ「小宮博士はお母さんに似ています。

お母さんだったらきっとそう言う」

小宮「それで私に会いに来たの？」

ハルカ「はい」

小宮「そうか」

やや間があつて、それからハルカを  
抱きしめる小宮。

ハルカは静かに泣いている。

○漫画内・研究所の周辺（夜）

自衛隊員たちが懸命に周辺の封鎖と住民退避に当たっているが、異界化の速度は早く、焼け石に水。車両や建造物が次々に宇宙空間と化していく。

○漫画内・体育館（夜）

倉庫に逃げ込もうとするリン。だが先に中に入っていた防護服の職員が扉を閉めてしまう。

リン「待って！」

倉庫の扉を叩くリン。ドン、という衝撃があつて、倉庫は中から開く。扉に倒れかかった職員の血まみれの死体、その向こうに死体の血をすすする甲虫人間が見える。

甲虫人間はリンに気付くと甲高い鳴き声をあげて……襲いかかろうとした刹那、その眉間を銃弾が貫く。

リンが振り返るとそこには拳銃を構えた山中がいる。

山中「今日はこんなことばかりだ」

山中、リンを見て、

山中「あれ、どこかで会った？」

○祖母の家・ハルカの部屋（夜）

献本の「完」のページ以降を裏表紙ごとにもぎ取る手。

×

×

×

献本の背表紙を裁断する手。

×

×

×

バラけたページに綴じ穴を開けて紐を通す手。

×

×

×

出来上がった新たな献本を覗き込む一同。

牧野「諸君。この部屋には諸君の描いてくれた『崩壊のスタンダード』理想の最終回が



ある。そして、完結を待ちわびる――」

G O D 「そういうのいいんだよ」

牧野 「いやまあ、うん、そうだけどさ」

印刷した自分の最終回原稿を解体された献本に繋げて紐で閉じるG O D。

G O D 「よし、さあ来いや」

献本を見守る一同。

何も起こらない。

しばらく見つめているが、一向に変化が起こる気配はない。

田楽 「若干予想していたことではありますが、何も起こらないですね」

ページをめくるふわにゃん。

ふわにゃん 「ああっ！」

○漫画内・体育館の外（夜）

体育館から走り出てきたリンと山中。

彼らが目にしたのは膨張する巨大な

宇宙空間。

二人、それを眺めて、

山中「あの化け物に食われるか、あそこに見える何かを待つか」

リン「それだけ？」

山中「いや」

山中、拳銃でリンを撃ち殺す。

それから自分の顎に銃口をあてて、拳銃自殺。

二人の死体に群がる甲虫人間たち。

ホームレスの親子がそれを遠くから眺めている。

それから親子は何事もなかったかのように歩き出す。

親子の行く先々には様々な死体が転がり、暴力沙汰が巻き起こっているが、とくに目もくれず親子は歩き続ける。

親子父「しりとりしようか。死ぬ」

親子息子「ぬか喜び」

親子父「瓶詰め地獄」

親子息子「腐った死体」

親子父「遺体安置所」

親子息子「黄泉の国」

親子父「逃げられない」

親子息子「イン・ザ・ヘル」

○祖母の家・ハルカの部屋（夜）

G O Dに怒鳴りかかる牧野。

牧野「いやちよつと待てよおおお！」

G O D「顔を近づけるな」

ねこぢる風の絵柄で描かれたG O Dの  
最終回をバンバン叩きながら牧野は

まくし立てる。

牧野「おかしいだろこんなの！ 意味が分か

らないし大体暗すぎる！ 未完の最終回

との繋がりだって無いじゃないか！ 小宮

博士どこ行ったの！？ あと刑事のアンド

リュー山中って一応主人公だったよね！」

G O D「千影先生は何でも試せと言った」

牧野「いやでも、こういうことかなそれっ

て！？ どちらかと言えばこれ蛭子さん

とかガロ系の漫画じゃない！？

牧野「つげ義春とか！」

G O D「文句あるのか」

牧野「あるよ！」

田楽「まあ、まあ、まあ。あの、目的を確認  
しましろう。こうやって最終回を作ってる  
のは中に入った二人を救助するためじゃ  
ないですか」

G O D「まあそうだ」

牧野「そうだよ」

田楽「G O Dさんの最終回も大変魅力的  
だとは思いますが、ただこれ、全員死に  
ますよね？」

G O D「人間みんな死ぬからな」

田楽「死ぬのはちよつと……まずいんじや  
ない、かなあ？ みたいなの……」

G O D「一理ある」

牧野「千里あるわ！」

田楽「ここはあの、手前味噌にはなりますが、  
私の最終回を繋げてみたいんですよね」

牧野「よし、やれ！ D J味噌田楽」

G O D 「お前に決定権あんのかよ」

不満そうに自分の最終回を取り下げる

G O D 。

田楽 「田楽、行きます！」

牧野 「おう！」

○漫画内・老舗そば屋（夜）

小宮がのれんをくぐって入ってくる。

女将 「はいらっしゃいねー、カレーうどん

一丁ねー、はい待っててねー」

黙って席に座る小宮。

小宮 N 「この店では、客にメニューの選択権

はない。だがそれでいい。どうせ誰もカレ

ーうどん以外頼まないのだから。この店が

そば屋であることを思えば、一見さんは

〈そば〉だけにメン食らうに違いない。

なぜカレーうどんなのか。なぜ勝手に決め

られるのか。その理由は誰にもわからない。

だが、それがこの店のしきたりだ。常連客

はそれを求めてこの店を訪れる。そして、

出てくるカレーうどんはいつでも絶品だ」

厨房の方を見る小宮。女将が水道水をコップに入れている。

女将、その水をそのまま小宮のテーブルに持ってくる。

小宮N「この店では客に出す水は水道水だ。

結局は同じ水とはいえ、なにかしらの

オブラートに包むのが一般の飲食店だろう。

その意味で言えば、この店は飲食店失格かもしれない。だが、ここで試されて

いるのは、実は客の方なのだ。水道水を是とするか非とするか。言うまでもなく

それはカレーうどんの出来とは関係がない。

なんとなれば、カレーうどんを作っているのはあの女将ではなく旦那の方なのだから。

しかし、勝手なメニュー選択、そして水道水、このことで店を見限り出ていく客もい

ることだろう。彼ら彼女らは決してこの店のカレーうどんに辿り着くことはできない。

いわば、これは周到に仕組まれた客の選別

試験なのだ。この店のカレーうどんにはそれだけの価値がある。あるいは、数々の試練の存在が、そう思わせているだけなのだろうか？ そのことを確かめるために、常連客は今日もこの店にやってくる」

小宮、微笑みを浮かべて、

小宮「これでいい」

○祖母の家・ハルカの部屋（夜）

献本を投げつけて田楽に怒鳴りかかる

牧野。

牧野「いやこれでよくねえだろうがああ！

なにこれ！？　なんでグルメ漫画になつて

るの！？　『孤独のグルメ』的な！？」

田楽「いや、牧野さんね、これには意図があ

るんですよ。『崩壊のスタンダード』の

ラスト二話は新型コロナの流行期に描かれ

たものとあって非日常に侵食される日常の

不安が色濃く滲み出ている。ですからもし

千影先生が生きていたらいつか平凡な日常

への回帰を描いたと思うんですよ。平凡な日常の象徴、それはやはり食なんだと私は思うんです。皆さんも見たでしょう、ふわにゃんがスイーツを食べるときのあの幸せそうな顔を。あれこそが日常じゃないですか。新型コロナ禍を過ぎた今日まで先生は生きることができなかつた。平凡な生活を取り戻すことができなかった。だからその願いを私はこの最終回に込めた。そういうことです」

牧野「いや、理屈はすごく……そう言われると、うーん、いや、テーマ的には立派だと思っけどさあ、思っけどたださあ……」

ふわにゃん「ふっふっふ」

怪訝な表情でふわにゃんを見る一同。

不気味な笑みを浮かべるふわにゃん。

ふわにゃん以外の三人、

三人「……どうぞ」

○漫画内・研究所の研究室



小宮、ネッカーの立方体のオブジェを見つめているうちに、オブジェから発生し拡大していく異界化に巻き込まれる。

異界化した研究所は宇宙になり、小宮はその新たな宇宙を漂う。

○漫画内・研究所周辺（夜）

止まらない異界化、膨張する新宇宙。

山中、目前に迫った新宇宙を眺め、

山中「メグミ……」

自ら新宇宙に踏み出す。

やがて、地球全体が新宇宙に呑み込まれる。

○漫画内・新宇宙空間

声がこだまする。

山中「俺は誰だ……」

小宮「私は誰だ……」

山中「俺たちに何ができる……」

小宮「私たちには何かができる……」  
リン・ハルカ「私たちは……」  
小宮・山中「私たちは……」  
全員「テツオ……」

○祖母の家・ハルカの部屋（夜）

沈黙に包まれた室内。

牧野「これ、映画版の『AKIRA』じゃない？」

田楽「映画版の『AKIRA』ですね……」

GOD「『AKIRA』だわ。映画版の」

泣き出すふわにゃん。

ふわにゃん「『AKIRA』も好きなんです

僕はあああ！」

田楽「ふわにゃん、みんな『AKIRA』は好きよ。それは別に良いと思うのよ」

GOD「『AKIRA』面白いよ『AKI

RA』」

田楽「だけどさ——」

牧野「パクつちやダメだろ！ 最終的に

パクっちゃったら台無しだろ！　なんで  
そこで『AKIRA』パクったんだよ！」  
GOD「だったらテメエが描けや！　人の  
漫画に文句ばっかつけやがって！　テメエ  
が描け！」

牧野「俺は絵が描けない！　読者専門だ！」  
GOD「誇って言うことかテメエ！」

牧野に掴みかかるGOD。  
ケンカになりそうになったところで、  
ドアを開けて昌子が顔を出す。

昌子「なんか、騒々しいけれども……」

牧野「いや！　なんでもないです！　すい  
ませんうるさくて！　もう終わります  
から！　もうあの、はい！」

昌子「リンちゃんの姿が見えないようだけれ  
ども……」

牧野「いやあ！　えっ！　リン！　えっ！  
しどろもどろになる牧野。」

昌子「漫画の中にも入っちゃったのかね」  
GOD「え」

昌子、笑いながら

昌子「いやね、千影も昔、よくこんな風に急にいなくなっただけですよ。それで、翌日にはフラッと戻ってくる。どこへ行ってたんだーって聞くと決まって漫画の中だって。それしか言いません。だから私もそれ以上聞かない。でもそうやっていなくなると、帰って来ると、悩み事も消えちゃうんだね。憑きものが取れたように元気になる。だから、放っておいたんです。あの病気の時だけはそういうわけにはいかなかったけれども。あ、夜ごはん、食べていきます？」

田楽「あ、いえ、お気遣いなく」

昌子「そうですか。じゃあごゆっくり」

扉を閉めて去っていく昌子。

牧野「どう思う？ 今の話」

GOD「知るか。……でも、逃げ場が欲し

かったんじゃないの、ハルカさんも」

田楽「みんなそうでしょ、漫画読みなんて」

ふわにゃん「(頷く)」

牧野「そうだな。俺も小学校の頃に――」

田楽「あ、その話はさつき聞きましたから

大丈夫です」

牧野「わかってるよ！ 遮るな！ そうじゃなくて！ 俺思ったんだよ！ やっぱりさ、これリンさんとハルカさんの物語として描くべきなんじゃないのかって。それが『崩壊のスタンダード』の本当の最終回なんじゃないかって。それを！ 聞いたかったんだよ……」

沈黙。

○同・昌子の部屋（夜）

ノックして牧野たちがドアを開ける。

牧野「あのう」

昌子「はい？」

牧野「もしよかったら、本当にもしよかったらなんですけど……リンさんとハルカさんのお話を聞かせてもらえませんか。漫画描きたいんです。二人の漫画を」

(以下、次のシーンとカットバック)

×

×

×

昌子の話を聞く四人。

昌子「まあリンちゃんは気が強くて、千影とはよく衝突してましたけれども、千影もそういうところあるからね。お互い正直になれないところがありましたわねえ」

×

×

×

昌子「ハルカちゃんは考えすぎるんだね。

傍目にはボーツとして見えるけれども本当はいつも考えてるんだ。千影にももっと甘えたかったかもしれないけれど、我慢して自分で解決してしまっていた。

ああ見えて強い子なんです」

×

×

×

昌子「リンちゃんもハルカちゃんも、病気が病気だから千影をちゃんと看取ることができなかつたですから。色々話したいこともあったでしょうねえ。それこそ、お兄さんたちと同じように漫画の結末も聞きたか

ったかもしれないね」

○同・ハルカの部屋（夜）

一心不乱にノートに最終回のシナリオ  
を書く牧野。

×

×

×

田楽が中心となって構成会議。

田楽「やっぱり食ってというのは要素として  
入れたいんですよね。日常の象徴として」

牧野「（メモ取りながら）食……食……あ、

駄菓子屋使えるか……」

田楽「で、アンドリユー山中もやっぱり出し  
た方がいいと思うんですよ」

牧野「（頭を抱え）あいつなあ……」

GOD「優等生すぎるだろ。そんなつまら

ねえ漫画じゃねえよ。クリーチャーとか出  
せよクリーチャーとか」

牧野「いやでも方向性が……」

力強く頷くふわにゃん。

ふわにゃん「クリーチャーは要る」

G O D とふわにゃん、握手。

○同・千影の部屋（夜）

牧野が扉を開ける。感無量で、

牧野「ここが先生の――」

言い終わる前にG O D が牧野を押し  
けて部屋に入ってくる。

G O D 「どけバカ」

ふわにゃんがその後続く。

千影の作業机を改めるG O D とふわに  
ゃん。

G O D 「道具は揃ってるね。そっちは」

力強く頷くふわにゃん。

G O D 「よし、描くよ」

×

×

×

原稿用紙に最終話のネームを描いて  
いるふわにゃん。

×

×

×

出来上がったネームを仕上げるG O D。  
牧野と田楽も手伝っている。



○同・ハルカの部屋（朝）

げっそりとした四人が再び献本を覗き込む。

牧野、完成した新たな最終話を手に持って、

牧野「これを、これと、繋げる。それでもう、なにがどうなっても最後だ。そういうことにしよう……」

G O D 「だな……」

田楽「そっすね……」

ふわにゃん「（うとうとしながら頷く）」

牧野「じゃあ、やるぞ……」

最終話の原稿用紙を献本と一緒に綴じる牧野。

瞬間、全員床に倒れ込む。そしてうとうとしながら、

田楽「あのう、ひとつ思ったんですがあ」

牧野「うん」

田楽「未完の最終話のタイトルって『シユレ  
デインガーの手』じゃないですかあ」

牧野「うん」

GOD「元ネタはサターンの『街』っつー

ゲームだな。そこに同じタイトルのエピソードがある。千影先生、エピソードタイトルに他作品を引用したりパロディにするから。安部公房の短編をパロった『帽になった男』とか。帽子の帽ね、ハット」

ふわにゃん「傑作回でしたなあ……」

田楽「そのシュレインガーの手はシュレインガーの猫のもじりですよねえ。それで、シュレインガーの猫は量子力学の思考実験ですよねえ」

牧野「うん」

田楽「もしかして、完璧主義者の千影先生、あれを最終回のつもりで描いたんじゃないすかねえ」

牧野「というと」

田楽「読者に思考実験をしてほしかった、先行きの不透明な新型コロナの時代に、様々な世界の可能性ですとか、未来への

想像力を失わないで欲しかった……そんなつもりで、先生はあえて答えを提示せずにあのエピソードを最後に描いたんじゃないでしょうか」

GOD「猫の名前はエヴェレット。シユレデインガーの問いかけへの回答の一つがエヴェレットの多世界解釈……」

牧野「つまり、『崩壊のスタンダード』は未完じゃなくて完結してた」

田楽「ええ」

沈黙。

牧野「どうだっていいよ……」

全員の寝息が部屋を満たす。

クロが部屋に入ってきて献本のページをめくる。そこにはこれまでハルカとリンが漫画の中で体験したエピソードが描かれている。

○漫画内・美術館の前（朝）

美術館に向かって歩くハルカと小宮。

辺りは人っ子一人見当たらず、静寂に包まれている。

ハルカ「あの」

小宮「んー」

ハルカ「博士は、たとえば、自分が誰かに作られた存在だとしたら、どうします？」

小宮「なにそれ」

ハルカ「いやあの、なんていうか……自分で決めたこととか、考えてることが、本当に自分のものなのか分からなくなったりすることとかって、ないですか？」

小宮「ない。それに自由意志の話は専門外」

ハルカ「そうですか……」

小宮「どっちでもいいんじゃない？ 自分がそうしたいと思ったらその出所がなんであれ、それはあなたの考えだよ。人から影響されない人間なんていないしね」

ハルカ「そっかあ。そうですね」

小宮「ウソ。納得なんかしてないでしょ」

ハルカ「……そんなことないです」

小宮「それもウソ。そうやって人に合わせて  
ばっかりいる」

ハルカ「……」

小宮「研究者は納得したらそこで終わりだ  
から、もしあなたが私の弟子なら落第つて  
ところだね」

ハルカ「……」

小宮「でも自分に正直になれば及第。考え  
すぎるぐらいがちょうどいいんだよ。  
考えても考えなくてもどうせ毎日にか  
しらの決断をしてるんだから。その時に  
選ばなかった選択肢の想像力を失わない  
こと。考え続けること。それは必ず次の  
選択肢を選ぶときの材料になる。言っ  
てみれば後ろを向きながら前に歩くつて  
感じかな」

後ろを向いて後ろ歩きをする小宮。

ハルカ「後ろを向いて前に歩く、か……」

小宮「あれ、エヴェレット」

猫のエヴェレットの鳴き声。

ハルカが振り返ると、並んで歩いていたはずの小宮が消えている。

代わりに見えるのは視界を覆うくらい拡大した新宇宙。もうすぐ街全体が呑み込まれてしまいそう。

リンの声「ハルカ！」

振り返ると、美術館の入り口にリンが立っている。

ハルカ「お姉ちゃん……」

駆け寄ってくるリン。

息を切らして、

リン「そっちはからは走って来ないのね。普通こういう時って感動の再会的にお互いに走って来ない？」

ハルカ「うん」

リン「まあ、無事ならなんでもいいけど」

ハルカ「そうだねえ」

リン「ねえ、あれなんなの？」

不安そうに新宇宙を眺めるリン。

ハルカ「大丈夫だよ」

リン「何が大丈夫なのさ」

ハルカ「さあ、わかんないけど」

リン「あんたこんな時でも何考えてるか

わかんないね」

ハルカ「まあね。ま、色々考えてるんだよ」

その場に座って新宇宙の膨張を眺める

ハルカ。

リンも隣に座る。

新宇宙はもうすぐそこまで迫っている。

ハルカ「進路決めた」

リン「今言う？」

ハルカ「今だから言っておく」

リン「そう。なら、よし」

リン、ふわりと浮かび上がって、表情に恐怖の色を浮かべる。

その手を咄嗟に掴むハルカ。ハルカはうつすらと微笑んでいる。

二人、浮かび上がって、新宇宙に入る。

静寂に包まれる一面の新宇宙。

その星は一つまた一つと消えていって、

新宇宙はやがて静止した無の空間に。  
カメラが引くと、その静止した無の  
空間は『崩壊のスタンダード』十巻  
の最後に置かれた、オリジナル最終話  
の猫の瞳を描いたコマであることが  
わかる。

読ながら眠ってしまったのか、誰かが  
眠ったまま開いていたそのページは、  
ページを押さえるその人間の指をする  
りと抜けて、静かに閉じる。

(画面暗転)

### ○美大の外観

### ○美大・実習室

一年生の実習中。

イーゼルの上のキャンバスを眺めながら、  
ハルカがなにやら唸っている。

講師「(来て)手を動かさないと描けない  
よ」

しかしその絵、手のデッサンは既に



完成している。

講師「なんだ、できてるじゃん」

ハルカ「はあ、もつと良く描くにはどうしたらいいかなあって……」

ハルカの描いた手のデッサンの形は、山中が漫画の中でハルカにホログラム仮説を語った時のものと同じ。

講師の顔は漫画に出てきた佐久間と同じである。

## ○商店街

デジタル石碑の落成式。

石碑にはデジタルサイネージのディスプレイが埋め込まれていて、広告の合間に《スタンダード》を使ったAR商店街の風景が映し出される仕組みになっている。

現実の商店街は未だ廃れたままだが、ディスプレイに映し出される商店街は復興の兆しを見せている。

リンがデジタル石碑プロジェクトの  
説明をしている。

リン「私と妹にとっても此花銀座は思い出の  
商店街です。また、コロナ以前の活気が  
戻ってきて欲しいという思いがあります。

〈スタンダード〉はあくまであり得たかも  
しれない風景を作り出すものですが、それ  
がいつか、あり得るかもしれない風景に、  
そしてあり得た風景になることを願って  
おります。ありがとうございます」

参加者の拍手。

### ○墓地（夕）

千影の墓参りに来ているリンとハルカ。  
ハルカ、供え物に宇宙の絵を置く。

リン「それ、買ってきたの？」

ハルカ「自分で描いた」

リン「上手いもんじゃん」

ハルカ「ふふーん」

○ファミレス（夜）

牧野、ふわにゃん、田楽、GOD、  
漫画を手に侃々諤々の大激論。

そこにリンとハルカがやってきて、  
議論の輪に加わる。

全員とても嬉しそう。

○祖母の家・和室（夜）

クロを抱いた昌子がやってきて、

千影の仏頂面の遺影の飾られた仏壇  
に大福を供える。

昌子「はい大福さん」

以前は仏頂面だった千影の遺影は、  
今は少しだけ笑っているように見える。

（了）